

展開科目としての「現代都市論」の映像資料アーカイブズ(2) ～教育コンセプトの再構築のために～

吉 田 和比古

The Visual-Archives for the lecture of the Contemporary Urban Study as a Developed Education ? -for a Reconstruction of a new educational Concept-

Kazuhiko Yoshida

This paper is a new research which follows the latest paper (2001). This time, it is so characterized that the concerning TV-Programs (so-called a mass media) were introduced in this paper as I could find and accumulated as Video and DVD-archives. More than hundred and forty new programs were added as a new visual material for concerning lecture and research. And it is also a new attempt to reserve TV-programs as DVD. How to applicate some digital characteristics for lecture is still considered. I would like to report details furthermore in a next paper.

Keywords : *Omnibus form lecture, Contemporary Urban Lietracy, The effective development of teaching aids a historical environment as a Human environment, Reconstruction of a historical urban sights.*

この論説は、2002年度の教養教育プロジェクト「展開科目『現代都市住民と都市空間』に関する映像資料のDVDアーカイブ製作プロジェクト」の成果報告である。

はじめに

1900年までには、世界の人口の10分の1が都市に住んでいるに過ぎなかった。ところが現在は、世界人口の半数は都市に住み、30年後には4分の3が都市に住むといわれている。毎月、900万人もの人々が都市に流れ、大雑把に言えば、毎月ロンドンが一つ誕生していることになる。都市人口の増加は、効率の悪い生活パターンを作り出し、地球上の生態系を破壊し、人類の生存を脅かしている。産業構造の変化によって衰退し、一地方都市になったイギリスのマンチェスターは、都市再生にかけて再開発を行っている。中国の上海も急激な人口増加で、慢性的な交通渋滞、公害による環境悪化など、生活環境は最悪の状態にあったが、改革開放による市場経済化は、上海を急速に変貌させている。大阪も、かつて東京と並び称される日本の中心であった。東京への一極集中、産業構造の変化は大阪の経済基盤を衰退させ、インフラ整備の遅れは生活環境を悪化させている。今、都市のグランドデザインを考えると、大阪は都市再生のパイオニアとして、どうすれば都市として生き続

けることができるのかが問われている。環境を保全し、文化に富んだ魅力ある都市を作り、都市景観を守り、地域の特性を生かした住民参加の風土を形成していくために何が求められているのか、こうしたさまざまな問題は、将来、都市生活者となるであろう学生が社会に出て行く準備段階の学習において、避けては通れない。そして、知識のための教育ではなく、知恵のための教育として、大学の総合科目教育の射程に常に入っていることが望ましいのではないか。

さらに、現在は、戦後半世紀にわたり官民を挙げて奔走してきた国土作りの流れが、大きな曲がり角にさしかかっている。たとえば首都・東京では、活発なオフィスビルやマンション建設に加え、建築関連法案の規制緩和による大学・企業の都市回帰が人口集中に拍車をかけている。これにより交通渋滞・大気汚染・廃棄物などの環境問題、ヒートアイランド現象、都市水害の多発など、都市住民の生活環境をめぐる問題が深刻化している。今後、少子高齢化による財源の縮小傾向のなかで安全・快適な都市を築くには、土木・建築・環境など各分野の優れた技術を育て、活用する必要性が高まっている。一方、地方都市では、中心部が衰退するドーナツ現象による経済的地盤沈下が、ヒト・モノ・カネの東京集中という悪循環を生み出している。地方の空洞化をどう防ぐのか。画一的な手法ではなく、自然・人文・歴史・経済な

ど、地域ごとの特性を十分に生かす新たな発想の創出が必要とされている。したがって、「現代都市論」では、都市・地域作りの再構築の方向性を探るとともに、その実現を支えるハード・ソフト両面の技術に目を向け、今後の可能性と課題について考えていく動機づけも必要であろう。

今回の報告は、2001年の吉田和比古・高津武彰共著「総合科目「現代都市論」のためのビデオ・アーカイブ～教育リファレンスとしての映像メディア～」『大学教育研究年報』第6号に引き続いて、総合科目「現代都市論」（後に「現代都市住民と都市空間」と改称）の、教育実践報告の一部として行われるものである。先に述べたように現代の学生に不可欠な学習としての『都市論』すなわち、URBAN LITERACYは、単なる机上の学問としてではなく、多くの具体的な視覚情報を必要とするものである。そのため、筆者は現代日本のマス・メディアに注目し、そこで放映される番組の収集が、絶好の教育素材になるであろうと、かねてから提唱してきた。前回の報告では、およそ100の番組を取上げた。時期としては、1990年代から2000年までの番組をリストアップした。今回の研究プロジェクトは、その継続的作業にあたり、ここで紹介する番組は、2001年から2003年にわたる3年間に、筆者が録画収集したものを紹介する。録画の形式は、従来のVHSビデオ録画を主体としているが、授業の教材として使用する際の便利さを考えると、早い時期にDVD化する必要があると考える。DVD化のメリットは、(1) 画質劣化を防ぐこと、(2) 映像資料の収納スペースを節約すること、(3) パワーポイントなどのデジタルの提示（プレゼンテーション）システムに対応し、映像情報を加工しやすいことなどが挙げられる。なお、近い将来には映像ライブラリーとしてのシステムを整備し、著作権などの関連する法律をクリアしたかたちでの閲覧システムを具体化していきたいと考えていることを付記する。

以下で紹介する番組は、主として5つのテーマに分類を行った。番組によっては、複数のテーマにまたがるものもあるので、分類は暫定的なものとする。

番組の〈番号〉は、前回報告書で取上げた番組番号に続く。番組の内容概説に際しては、それぞれの番組のホームページも参考にした。

1. 現代都市論としての「歴史的景観の復元・保存」

前回の原稿でも述べたように、景観学習は現代都市論の基本的テーマの一つであることは異論がないだろう。大学の授業という限られた時間の中でそれを詳細に論ずることは不可能であるが、聴講する学生の郷土再発見（エリア・スタディ）への導入として、小テーマを設定することは可能である。例えば、新潟の歴史的景観の紹介、関東甲信越および東北のいわゆる「小京都」に指定さ

れた都市の紹介、歴史的景観としての近世城郭の復元や復興への行政や市民の取り組みの紹介などは、日常的に意識化されない生活風景を意識的に分節するための手がかりとなるだろう。したがって、歴史的景観学習は、単なる教える側の世代のノスタルジーの押し付けではなく、広い意味で日本文化の再発見・伝統技術の継承・美意識の陶冶などの契機ともなりうると考える。以下で紹介するのは、そうしたテーマを視覚的に印象づけるためにも有益と考えられる番組である。実際の授業での使用に当たっては、小テーマに応じて、いくつかの番組を断片的にコラージュするのが効果的ではないかと考える。

111.「輝け黄金のとき～金閣再建・職人たちの30年戦争」〔2002年11月12日・『プロジェクトX～挑戦者たち～』・NHK・45分〕金閣寺は、1950年に放火で一度全焼している。戦前から金閣を守り続けた住職の村上滋養は完全な再建を目指したが、資金不足かや手がかりの少なさからその一部が再現できなかった。消失から10年、20年と時が流れるうちに金閣から金箔がはがれ落ち、漆も破壊されていった。さらに建物自体が腐る可能性も出て来た。再建開始から33年がたった1985年、村上もガンに侵され、床に伏した。金閣をよみがえらせたいという、病と闘う村上の願いに答えたのは、文化財修復の世界で名を挙げていた矢口一夫を中心とする職人たちだった。矢口は調査と研究を重ね、1年8ヶ月に及ぶ工事をスタートさせた。だが、金箔には原因不明の歪みが生じ、天井画を手がける画家も病に倒れるなど、再建は困難を極めた。黄金の寺はどのようにして輝きを取り戻したのか。長年にわたる修復作業に挑んだ全国の職人たちの意地と執念に光を当てる。〔テーマ：伝統技術・建築の保存と若い世代への継承〕

112.「信長の夢～安土城発掘～」〔2001年2月17日『NHKスペシャル』・50分〕戦国時代、織田信長が築き、完成から3年で炎上した安土城。現在その城跡の発掘が進められている。最近の研究・調査をもとに黄金の天守や天皇を向かえるための御殿など、安土城の全貌をCGにより再現する。そして安土城にこめられた信長の夢を探る。〔テーマ・CGによるかつてありえた風景の再現の可能性〕

113.「よみがえれ天下の名城～姫路城・昭和の大修理～」〔2001年9月11日・『プロジェクトX～挑戦者たち～』・NHK・45分〕平成5年、姫路城は、我が国初の世界遺産に登録された。倒壊寸前にまで荒廃した、高さ46メートル、重さ5700トンの巨大な木造建築を救ったのは8年にわたり行われた「解体修理プロジェクト」だった。メンバーは、法隆寺五重の塔の修復にも加わった「研究の鬼」と呼ばれる加藤得二。そして「播州一の宮大工」と謳（うた）われた和田通夫だった。姫路城を構成するすべての木は激しい歪みや縮みのため原形をとどめていなかった。まず、築城当時の正確な寸法を二人の経験と勘から割り出す。そして、城の要（かなめ）の心柱

を2年かけて探し出した。だが、せっかく見つけた巨木が、輸送途中の事故で折れてしまう。数々の危機を前に和田が発した一言がメンバーの心をついにした。誇りと意地をぶつけ合い、天下の名城をこの世に残す道を切り開いた人々のドラマを描く。〔テーマ：歴史的都市（城下町）の「ランドマーク」としての『近世城郭』復元への住民の思い〕

114.「桂離宮・魂の大修理」〔2003年9月2日・『プロジェクトX〜挑戦者たち〜』・NHK・45分〕京都・桂川の畔に日本最高の建築がある。桂離宮は、およそ400年前に皇族の別荘として造営された。広大な回遊式庭園の中心に立つ御殿は、木目が最も美しい北山杉の風合いを生かした数奇屋風書院造り。柱の節一つ一つの位置まで、室内の調度品や襖絵と調和するように、緻密に計算されている。戦前訪れたドイツの建築家ブルーノ・タウトは言った。「泣きたいような美しさ。永遠の美がここにある」それ以来、桂離宮の名声は世界的になっていく。しかし、昭和40年代、老朽化した桂離宮に崩壊の危機が迫った。シロアリに食われ、柱はぼろぼろとなる。白壁にひびが入り、床も傾き始めた。そのとき、大工に左官職人など、京都中の名工たちが結集し、昭和51年に空前の大修理が始まった。柱や床板など一万の木材をいったん解体し、補修して組み直す。しかし柱の節ひとつ違っても桂離宮の美は失われる。そのままの姿を保つため繊細な作業が求められた。職人たちを束ねる工事事務所の所長に抜擢されたのは、工事全体を請け負った大手建設会社の技術者、水本豊弘、あだ名は仁王。高卒で入社、20代でビル建設の現場監督を任されてきたが、日本建築に関してはズブの素人だった。水本は現場で必死に働く職人たちに話しかけたが、大工の棟梁・川上英夫をはじめ、寡黙な男たちから返事は返って来ない。水本は悩んだ。『自分が桂離宮をだめにしてしまうかもしれない』水本の髪は一夜にして白髪に変わった。一方、棟梁の川上は柱の見た目を変えない接ぎ木の方法に苦しんでいた。そして、すべてを決める白壁の修復。京都一の左官といわれた小川久吉が400年前の謎の塗りに挑んだ。日本が世界に誇る建築をよみがえらせるため、困難な仕事に立ち向かった人々の技と執念を描く。

115.「閑谷学校講堂〜四季に映える備前焼の大屋根〜」〔2003年3月8日・『国宝探訪』・ETV・25分〕岡山県東部、備前市の山間部に建つ国宝・旧閑谷（しずたに）学校講堂。江戸中期に築かれた、この和風とも中国風ともつかない異色の建築は、日本で初めて庶民の師弟に門戸を開いた学校である。創始者は、岡山藩初代藩主・池田光政。実直な性格であった光政は、政治の基本を学問に置き、儒学を奨励した。当時の学校建築としては群を抜く広大な空間が、光正の教育政策の独自性を今に伝えている。現存する旧閑谷学校は、光正の側近・津田永忠が指揮し、増改築したもの。永忠は、後に日本三大名園の一つ後樂園を設計した人物であり、光正の死後20年かけて、主君がともした学問の灯火（と

もしび）を守ろうとした。庶民のための学舎を永続させるために築かれた堅牢にして精妙、重厚にして華麗なる講堂。このたぐいまれな建築にこめられた人々の思いと、その思いに応えた職人たちの技と知恵をさまざまな角度から検証する。

116.「よみがえる民家〜木造建築で地域再生〜」〔2003年3月5日・『クローズアップ現代』・NHK・25分〕今、日本古来の木造建築・民家が見直されている。釘をほとんど使わずに柱や針を組み合わせて立てられた民家の中には、百年以上持つものが多く、民家を再生した分譲住宅まで登場した。背景には、日本の風土にあった伝統建築が豊かな暮らしにつながるという認識が広がりつつあることに加え、戦後大量生産された新建材を使った住宅で、大量の廃棄物や「シックハウス症候群」などの問題が出てきたことがある。木造建築の需要が伸びたことで、地域の再生に結びつく例も出てきた。山形県金山町では、「金山型住宅」と呼ばれる雪に強い伝統住宅の需要が伸びる中で、地域の産業が活性化、若者たちの雇用にもつながってきた。木造建築ブームの広がり地域にもたらしたものを探る。

117.「アール・デコの館〜朝香宮邸誕生物語〜」〔2003年12月14日・『新日曜美術館』・ETV・45分〕1925年にフランス・パリで開催された現代装飾美術・産業美術国際博覧会は別名「アール・デコ博」として知られている。アール・ヌーヴォーに替って登場し一世を風靡したこの装飾様式は、生活一般にまで及び、人々の生活様式を大きく変えた。このアール・デコに大きな影響を受けた日本人がいる。――朝香宮鳩彦王、允子妃殿下。パリ遊学中に自動車事故に遭遇し、長期滞在を余儀なくされた両殿下はこの博覧会に深い感銘を受け、かねてから構想中であった自邸の設計、デザインにアール・デコを取り入れた。そして、完成したのが日本有数のアール・デコの館として人気の旧朝香宮邸こと現在の東京都庭園美術館である。朝香宮邸の装飾には1925年のアール・デコ博で活躍した作家達が多く関わっている。アンリ・ラパン、ルネ・ラリック、アンリ・ブシャール、レイモン・シヨブなど錚々たる顔ぶれ。両殿下は、設計や室内装飾の細部にまでさまざまなアイデアを出し、意見を述べられたという。おふたりのパリでの日常や作家たちとの交流を垣間見ることが出来る貴重な領収書も、今回の展覧会では初公開される。朝香宮邸を詳しく見てゆくと、パリのアール・デコの新しさに、独自の伝統を取り入れた革新的な芸術の産物であったことがわかる。文化のキャッチボールの上で成し得た“パリのアール・デコ”と“日本の伝統美”のコラボレーション……。番組では、アール・デコ博覧会当時の記録映像や新に取材した両殿下に因んだパリの映像を交えて紹介。朝香宮邸ならではのアール・デコの魅力と朝香宮の思いを知る。〔出演〕三枝成彰（作曲家）、牟田行秀（東京都庭園美術館学芸員）。〔テーマ：明治以降の近代建築の保存とその再利用の可能性〕

118.「京都ふぁーすとくらす～タバコ王のハイカラ宮殿～」[2004年1月1日・BS2・30分] 明治の中期「タバコ王」の名を欲しいままにし、当時全国第三位の資産家であった実業家・村井吉兵衛。村井がその財を費やし建設した巨大な洋館が京都・東山に残る「長楽館」である。世界に二つとないシャンデリア。ロココ調の応接室。イスラム風のタイルが敷き詰められた喫茶室。そして最上階には、東山を借景にした極上の和室。訪れたロックフェラーや清朝の一族も驚愕したという明治の超デラックスな洋館を、花柳錦之輔が探訪する。[出演] 花柳錦之輔

119.「建築って難しいなあ～三浦朋訓・27歳、厳冬の山村修業～」[2004年1月2日・『若者たちの現場2004』・ETV・30分]

建築家の安藤忠雄氏の事務所働く、入社2年目の建築デザイナーの卵・三浦朋訓さんは、今、初の大仕事に取りかかっている。岐阜県加子母村での木造のコミュニティセンター建築の責任者を任されたのだ。しかし、この抜擢は、厳しい修業の場に行くことを意味していた。「使い手の気持ちに立てるよう、高齢者の福祉施設で働け」、「作り手の気持ちを理解するため地元の大工と一緒に働け」と安藤氏は檄を飛ばす。都会的な芸術肌の建築デザイナーに憧れ、大学でもコンクリート建造物のデザインばかりに凝ってきた三浦さんが、人口3500人という山村での初めてづくしの試練を通じて、自分の仕事に何を感じ、どう変わっていくのか。三浦さんの成長を見つめる。

＜そのほかの関連映像資料＞

120.「甦る世界遺産・御影堂～京都・西本願寺修復の記録～」[2003年3月27日・BS2・60分]

121.「威信を示す空間～二条城・二の丸御殿～」[2002年1月5日・『国宝探訪』・ETV・30分]

122.「平城京復元～奈良の都～」[2002年8月6日・『歴史で見る日本』・ETV・30分]

123.「百年の古民家～遠藤ケイとよみがえる暮らしの知恵～」[2002年8月14日・BS2・90分]

124.「日本の旧家・1200坪の大屋敷を覗く～新潟県・伊東家～」[2002年8月14日・平成8年（1996年）4月1日の再放送・BS2・90分]

125.「日本の古民家」[2003年8月18日・「WEEKEND JAPANOLGY」・BS1・45分]

126.「よみがえる民家～カールさんの挑戦～」[2003年12月28日・BSN・60分]

127.「民家再生ビジネスにかける」[2002年10月13日・『ハローニッポン!』・BS1・45分]

128.「夢開く新発田城～復元にかける男たち～」[2003年1月11日・TeNY・50分]

129.「掛川城復元工事」[2003年11月20日・『思いきりテレビ＜今日は何の日＞』・TeNY・12分]

130.「職人を目指す若者たち」[2003年5月6日・『クローズアップ現代』・NHK・25分]

131.「公共建築の再利用」[2003年5月10日・『視点・論点』・ETV・10分、話し手:安藤忠雄]

132.「岐阜県美濃市・重要伝統的建造物群保存地区」[2002年5月13日・『思いきりテレビ＜今日は何の日＞』・TeNY・12分]

133.「密着!薬師寺・平成の大復興」[2003年4月29日・『悠久の白鳳ロマンススペシャル』・TeNY・90分]

2. 都市と災害

現代都市が抱える問題の一つは、いうまでもなく「人為的災害・自然災害」にどのようなセーフティ・ネットを構築するかということである。1995年の「阪神大震災」にかかわる論者は、「総合科目「現代都市論」のためのビデオ・アーカイブ～教育リファレンスとしての映像メディア～」(「大学教育研究年報」2001年)の高津執筆の部分もあわせて参照されたい。いかに、紹介する番組は、人間が集中的に居住する都市空間が、災害に対していかに脆弱であるかを具体的に示す良質の番組が多く見受けられる。ただ忘れてならないのは災害に対する都市のむろさは、とりもおさず現代の科学技術文明そのものが内包している危うさと相似であるということである。

135.「東海地震・見直される防災計画」[2003年9月5日・『クローズアップ現代』・NHK・25分] 予知を前提とした大規模な防災体制の整備が進められてきた東海地震。その根幹となる国の防災基本計画が今年、見直された。国の東海地震対策が始まって25年目。GPS観測網の整備や新たなコンピュータープログラムによる解析技術の進歩などで、地震のメカニズムの解明が進み、予知の精度も飛躍的に高まっている。こうした成果を防災に生かすために、段階的に情報を出し、よりきめの細かい防災計画に役立てようというものだ。さらに、もう一つの柱として強調されたのが「建物の耐震化」。地震に直接備える予防策として行うべきとしている。しかし、国に先駆けて公共建築物や住宅の耐震化に取り組んできた静岡県では、多くの問題に直面している。番組では、東海地震予知の最新の研究と、新たに打ち出された東海地震対策の課題を伝える。(NO.1793) スタジオゲスト:岡田恒男さん(東京大学名誉教授・東海地震対策専門調査会座長) スタジオ出演:中村淳(NHK社会部記者) 松永一史(NHK静岡局記者)。以下の関連データは、番組のホームページより引用。●シミュレーション関連:気象庁[電話]03-3212-8341代http://www.jma.go.jp/●耐震化補助制度「TOUKAI-0」(とうかいぜろ) 関連口静岡県都市住宅建築安全推進室[電話]054-221-3076、http://www.pref.shizuoka.jp/※あるいは静岡県内各市町村の建築・住宅関連事項を所管する部課。

136.「減災～阪神大震災の教訓はいま～」[2003年1月17日・『NHKスペシャル』・NHK・50分] 災害対策の現場で『減災』という考え方が打ち出されている。犠牲を

「防ぐ」というより、「少しでも犠牲を減らす」という発想である。その根底には、限られた人・物・金をどのように効率よく配分して被害を最小限に抑えるか、という合理的な災害対策の思想がある。その具体的な対策の一つは、現在開発が進められている『電子地図GIS』である。地図上に瞬時に被害予測を表示し効率的な救援を可能にしようとするシステムである。番組ではさらに、木造住宅の倒壊からいかに命を救うか。木造住宅の耐震工事、そして人命救助のための新しいシステムを考える。

137.「どのように住民を災害から守るか～地方自治体危機管理～」[2003年9月6日・『土曜フォーラム』・ETV・70分] 東海大地震の可能性が指摘され、すでに30年の作業が経過している。去年4月、政府の中央防災会議では、地震強化地域を8都市、263町村に拡大した。新たな強化地域（危険地域）に暮らす1200万人。東海地震は予知できることが前提になっていたが、近年になり突然地震が発生する可能性も指摘されている。また2003年4月には、東南海・南海地震の被害想定も発表されている。番組では、切迫性が増した東海地震の地方自治体の見直し計画を中心に、住民本位の防災体制・危機管理のあり方を討論する。出演：石井隆一（総務省消防庁長官）、石川嘉延（静岡県知事）、林春男（京都大学防災研究所巨大災害センター教授）、北村春江（兵庫県前芦屋市長）、小嶋富雄（NHK報道局気象・災害センター長）、司会：室岬益輝（神戸大学都市安全研究センター教授）～滋賀県大津市・全国市町村国際文化研修所で収録～。

138.「首都激震」[2003年8月31日・『NHKスペシャル』・50分] 古くから日本は震災に見舞われやすく、東京では直下型地震がいつ発生してもおかしくない。日本は地震の多い国であることを日本人は経験的に自覚している。しかし、何か日常的に対策を講じているかと聞かれると返答に困るのが実情である。いつ訪れるとも知れない危機に対し敏感になれと言われてもなかなか難しい。番組では各種の予測調査に基づいて、東京が直下型地震に直撃されたときの被害の模様を、CGを駆使した予想図で描き、防災対策の必要性を強く訴える。実践的な避難訓練をはじめ、高層ビルや企業の危機管理など、出される問題はきわめて具体的で、すぐにでも取り組めそうなものばかりである。すべては「自分がどんな町に住み、どんな職場で働いているのか」を徹底的に再確認すること。自分を見つめなおすことが防災のまず第一歩である。ドイツの保険会社は、東京の自然災害の危険度を「ニューヨークの17倍、シンガポールの200倍」に想定しているという。世界から見れば、東京都はそういう都市でもある。

139.「震災の記憶を伝えたい～阪神淡路大震災から7年～」[2002年1月15日・『クローズアップ現代』・NHK・30分] この1月17日で阪神淡路大震災から7年。街の復興が進んだ被災地 神戸では、震災の記憶の風化

が心配されている。こうした状況に危機感を持った被災者たちが、震災の記憶を伝える様々な活動を始めた。被災者自らが当時の体験を話す語り部グループの取り組み。震災で傷ついた商店街のアーケードをモニュメントとして街に残そうとする店主たちの試み。番組では、震災の悲しみを乗り越えて、その記憶を今に伝えようとする被災者たちの姿を見つめる。(NO.1529) ゲスト：堀内正美さん（俳優・震災モニュメントマップ作成事務局）
●番組に出てくる商店街の場所：神戸市長田区にある「西神戸センター街」という商店街。JR新長田駅から南に徒歩10分ほど。地下鉄駒ヶ林駅から北に徒歩5分。早ければ2月に、一部撤去が始まる予定。
●ゲストの堀内正美（まさみ）さんについて：俳優の堀内さんは、神戸市内の自宅で被災し、避難所などでボランティア活動をされた体験がある。それ以降も、様々な活動に取り組んできた。現在は「1.17希望の灯り」というNPO設立のため、奔走している。また、震災モニュメントマップ作成委員会という組織では、被災地に点在する震災のモニュメント（記念碑）の地図を作っている。
<http://www1.plala.or.jp/monument/>

140.「“まち”はよみがえるか～神戸・長田区御蔵通～」[2002年1月17日・『NHKスペシャル』・50分] 7年前の阪神大震災で町のほとんどが焼け野原となった神戸市長田区御蔵通り（みくらどおり）5丁目・6丁目。この町は今も更地が目立ち、震災前住んでいた人の三分の二の人がまだ戻ってきていない。かつての隣人たちはどこへ行ってしまったのか、なぜ戻ってこないのか。去年の秋、住民たちは震災後ばらばらになってしまった元住民たちの住所を調べ、訪問調査を始めた。番組は、神戸市による区画整理事業の指定を受けた200メートル四方の小さな町が舞台となる。訪問調査を通じて、住宅政策の矛盾や、かつてコミュニティの崩壊など、これまで住民たちが抱えてきたさまざまな問題、歳月が浮き彫りになる。かつての隣人たちが戻ってこないことが明らかになる中、残された人々は失われたコミュニティをどう再構築していくのか。震災ですべてを失った人々が、人のつながりの回復を目指して新しい街づくりに取り組む様子を追う。

141.「ヒートアイランド～今東京に何が起きているのか～」[2002年6月29日・NHK・50分] 都市部だけが異常に気温が高くなるヒートアイランド現象。特に東京は地球温暖化を上回るペースで暑くなり、その結果、局地的な集中豪雨や大気汚染などさまざまな問題をもたらしている。ヒートアイランド現象の原因と影響を徹底検証する。

142.「鉄筋破断の衝撃～問われるコンクリートの安全性～」[2003年4月10日・『クローズアップ現代』・NHK・30分] 鉄筋コンクリートの安全性を脅かす現象「鉄筋の破断」が、近畿や北陸の道路橋脚15カ所で見つかった。原因は、アルカリ骨材反応というコンクリート内部の膨張によって、鉄筋が引きちぎられたためと考えられる。砂などに含まれる鉱物とセメントが化学反応を起こし、膨

張する現象である。従来は鉄筋があるから構造上は問題ないとされてきたが、今回の調査結果を受け「建築物が条件によっては崩壊してしまう危険性もある」と専門家は語る。今回の発見は、別目的の補修作業中の偶然にすぎない。事態を重く見た国土交通省は3月、緊急調査を指示した。しかし外見からの破断発見は難しく、その補強法も模索中だ。社会インフラ全体の見直しに繋がりがかねない「鉄筋破断」について考える。(NO. 1728) スタジオ出演：斎藤宏保 (NHK解説委員)

143. 「検証・アメリカ大停電」[2003年9月5日・『クローズアップ現代』・NHK・25分] 9月、アメリカで起きた大停電。都市機能は完全に麻痺し、影響を受けた市民は5千万人、損失は7千億円に上ると言われている。この大停電のきっかけは、オハイオ州で起きた送電線の異常だったといわれている。それがわずか9秒でアメリカ中西部から東部、カナダへと拡大し、史上最悪の事態をもたらした。本来なら問題が起きた送電網を他の地域と切り離すシステムが働き、被害が拡大するのを防ぐことができたはずだが、今回はそれが機能しなかった。さらに被害が拡大した背景には、電力自由化の結果、投資が滞った送電施設の老朽化があったとみられる。今なお原因究明が続く大停電を詳しく検証する。(NO. 1796) スタジオゲスト：南部鶴彦 (学習院大学経済学部教授)、中継出演：湧川高史 (NHKアメリカ総局記者)。

144. 「テレビは災害をどう伝えてきたか」[2003年2月2日・『NHKスペシャル』・NHK・50分] テレビは過去の大災害との格闘の中から、現在の災害報道のシステムを築き上げてきた。被災の全体像をつかむため独自取材網の重要性を再認識させられた「伊勢湾台風」。被災者の切実な訴えを受け『安否情報』を初放送した「新潟地震」。テレビ報道のこれまでの軌跡を検証し、今後のよりよいあり方を考える。

145. 「子どもをシックハウスから守れ」[2002年10月27日・『クローズアップ現代』・NHK・30分] 今年4月開園した大阪府堺市の保育園で、国の指針値の10倍を超える化学物質・トルエンが測定された。トルエンは、床表面のコルクとその下の合板を貼り合わせるために使われた接着剤に含まれていた。園児には、微熱や目の赤み、咳などの症状が見られ138人のうち19人が「シックハウス症候群」の可能性が高いと診断された。園では床の張替えを行って接着剤そのものを取り除いたが、トルエンの濃度は指針値を下回らず、別の化学物質まで指針値を上回った。その後、園はNPO「シックハウスを考える会」の支援を得て再び床の張替えを決断、今度は最先端の装置を使ってそれぞれの建材から放散する化学物質の量を測定してから建材を選ぶことにしている。園児を化学物質からどう守るのか、保育園の取り組みを通して、シックハウス対策の難しさを浮き彫りにする。(NO. 1644) スタジオゲスト：田辺新一 (早稲田大学理工学部教授)。

<その他の関連映像資料>

146. 「安全な住環境をどうつくるか～土壤汚染問題を考える～」[2003年11月8日・「BSフォーラム」・BS1・50分] (日本政策投資銀行副総裁) 山口公生 (環境ジャーナリスト) 幸田チャーミン (名城大学助教授) 水尾衣里 (日本不動産研究所主任研究員) 廣田裕二【司会】(元NHK解説委員) 藤田太寅～東京・有楽町朝日ホールで録画～。

147. 「関東大震災から80年」[2003年9月1日・『視点・論点』・ETV・10分、話し手：防災情報機構会長：伊藤和明]

148. 「関東大震災～首都東京の改造計画～」[2003年1月7日・『歴史で見る日本』・ETV・30分]

149. 「南関東直下型地震に備える」[2003年9月1日・『あすを読む』・NHK・10分、話し手：山崎登・解説委員]

150. 「南海地震に備える～新たな時代の防災に向けて」[2003年2月8日・『金曜フォーラム』・ETV・70分]

151. 「徹底検証・大地震にどう備えるか～東海地震・広がった危険エリア～」[2002年9月1日・『21世紀・日本の課題』・NHK・60分]

152. 「火山ガスと共生できるか～三宅島・帰島への模索～」[2003年9月2日・『クローズアップ現代』・25分]

153. 「東海地震・見直される防災計画」[2003年9月1日・『クローズアップ現代』・NHK・25分]

154. 「十勝沖地震の教訓」[2003年9月30日・『あすを読む』・NHK・10分]

155. 「巨大地震・津波災害にどう備えるか」[2003年10月18日・『土曜フォーラム』・ETV・70分] 出席者：(岩手県立大学教授) 首藤伸夫 (富士常葉大学教授) 重川希志依 (名古屋工業大学教授) 谷口仁士 (海の博物館館長) 石原義剛 (三重県地域振興部総括マネージャー) 東地隆司 (元NHK解説委員) 伊藤和明～名古屋国際会議場で録画～。

156. 「地震の予知と対策」[2003年7月28日・『あすを読む』・NHK・10分] 話し手：山崎登・NHK解説委員。

157. 「新たな都市災害・地下浸水は防げるか」[2000年7月8日・『サイエンスアイ』・ETV・45分]

158. 「都市災害にどう備えるか」[2000年5月31日・『土曜フォーラム』・ETV・70分]

159. 「水害地震・都市は災害にどう備えるか」[2000年10月20日・『金曜フォーラム』・ETV・70分]

160. 「集中豪雨から都市を守れ」[2002年7月27日・NHK・30分]

161. 「濁流が都市を襲う～中小河川の脅威～」[2001年6月17日・『NHKスペシャル』・NHK・50分]

162. 「土砂災害に打ち勝つために～広島・豪雨被害の教訓～」[2001年6月30日・『BSフォーラム』・BS1・50分]

163. 「建物への恐怖～トルコ被災地はいま～」[2002年8月31日・NHK・30分]

164. 「災害予防と住民参加～宮城県沖地震に備える～」[2003年6月14日・『土曜フォーラム』・ETV・70分]

- 165.「自律する災害ボランティアを目指して」[2003年10月18日・『土曜フォーラム』・ETV・70分] (作家) 藤本義一 (阪神高齢者・障害者支援ネット副代表) 黒田裕子 (災害ボランティアバイクネット埼玉事務局長) 坂井豊治 (神戸大学都市安全研究センター教授) 室崎益輝【司会】(NHK解説委員) 山崎登〜東京・千代田放送会館で録画〜。
- 166.「安全・安心〜災害に強い道作り〜」[2000年9月8日・『金曜フォーラム』・ETV・70分]
- 167.「災害と情報〜有珠山・三宅島噴火に学ぶ〜」[2000年9月10日・BS1・『サイエンスアイ』・50分]
- 168.「災害環境を知る」[2003年1月16日・『視点・論点』・ETV・10分]
- 169.「社会を支える基盤をどう築くか〜治水の国オランダに学ぶ〜」[2002年1月5日・『金曜フォーラム』・ETV・70分]
- 170.「都会の洪水」[2004年2月12日・『たったひとつの地球』・ETV・15分]
- 171.「なぜ都市は暑いのか〜検証・ヒートアイランド現象〜」[2000年7月26日・NHK・30分]
- 172.「ヒートアイランド昆虫記〜警鐘を鳴らす東京の虫たち〜」[2003年10月19日・『素敵な宇宙船地球号・第306回・NT21<テレビ朝日系列>・30分]

3. 都市再生〜地域特性の再発見と活用〜

173.「都市再生〜魅力ある街をどうつくるか〜」[2002年11月19日・『BSフォーラム』・BS1・50分] バブル崩壊から10年余り、日本経済は依然低迷を続け、不動産不況もまた脱出の糸口が見えないのが実情である。そうした中、都市部を中心に大規模な都市再開発が進んでいる。本年9月東京駅前に「丸の内ビル」が新しくオープンした。こうした再開発によって今までとは違う人の流れが生まれるなど、都市の活性化が図られようとしている。国も都市再開発の大型プロジェクトを推進する政策を打ち出している。7月には、「都市再生緊急整備地域」を発表し、東京・大阪など全国17の地域が指定された。国はこれらの地域で従来の都市開発におけるさまざまな規制を緩和すると同時に、金融支援を行い、都市の再生と地域の活性化を加速させようとしている。一方、不動産市場でも閉塞した状況を打破するようさまざまな動きが出ている。1999年にはインターネットを利用した不動産オークションも解禁され、不動産市場の現場に「情報公開と透明性」を導入しようという試みが始まり、同時に不動産の適正価格化が進んでいる。しかし、高層ビルの建設ラッシュが進む都心では、オフィス・フロアの供給過剰、さらには集中的な開発によるミニ・バブルの発生も懸念されている。こうした都市再開発の一方で、地方の都市や古い町並みを取り残されるという不安もある。「都市の価値」は、そこに住む人々が長い時間をかけて作り上げていくものといわれている。番組では、動き始めた

「都市再生プロジェクト」の中で、都市の価値はどのように見出されていくべきか。そして自分たちが暮らす街が、どうすれば魅力あるものに作り上げていくことが出来るのかが話し合われる。パネリスト：竹内佐和子 (東洋大学経済学部教授・都市デザインセンター長)、大槻啓子 (モルガン・スタンレー証券・株式調査部エグゼクティブディレクター)、池添吉則 (アイディーユー・不動産オークション会社・社長)、小澤一郎 (都市基盤整備公団・理事)、コーディネーター：飯田英明 (財団法人・日本不動産研究所・理事)。

174.「なぜ今東京再開発なのか？」[2003年7月20日・『BSディベートアワー』・BS1・120分] いま、東京は空前の再開発ラッシュに湧いている。汐留、品川、六本木、丸の内・・・都心部に、高層のオフィスビルやマンションが次々と姿を現し、街の風景を大きく変えようとしている。再開発ラッシュの理由は、経済のグローバル化やIT化への対応のためとされている。さらに、世界の大都市と比べて働く場、暮らしの場として見劣りするともいわれる東京の再生を図り、国際的な都市間競争で生き残ろうとしている。政府も景気対策の切り札として「都市再生」をかけた。去年、新たに法律 (都市再生特別措置法) を制定した。「都市再生特別地区」を設定し、そこでは都市計画法などにもとづく規制はすべて適用除外にするなど大幅に規制を緩和、再開発を後押ししている。しかし、こうした現状に対する疑問の声は少なくない。再開発による新たなオフィスの大量供給は、既存のビルの空き室を増やし、賃料の下落をもたらすのではないかと、そしてそれが新たな不良債権の増加につながるのではないかと (いわゆる2003年問題) オフィスやマンションの都心への集中に、学校や保育園、道路や鉄道などの都市インフラは耐えられるのか？都心の高層住宅でコミュニティはうまく形成されるのか？東京への重点投資を促す施策は地方の更なる地盤沈下をもたらすのではないかと？首都機能移転の動きとの整合性は？・・・江戸幕府が開かれてから400年の節目の今年。規制緩和によって相次ぐ再開発は、東京をどのように変えるか？東京は暮らし安い、魅力ある街に変わるのか？日本の中での東京の位置づけも含めて、徹底的に議論が行なわれる。

175.「超高層ビル乱立〜オフィスに何が起きているのか〜」[2002年11月12日・『クローズアップ現代』・NHK・25分] 長引く不況にかかわらず、来年、東京では超高層オフィスビルの完成が相次ぎ、東京ドーム50個分の面積を越える広さのオフィスが生まれる。この建設ラッシュの背景にあるのがITバブル時に立てられたオフィスの「希望的な需要予測」であり、さらに景気刺激のために次々打ち出された容積率アップなどの「規制緩和策」である。ところが、現実にはオフィス需要は一向に向上せず、今、ビルの空室率の急上昇で、空きビルという新たな「不良債権」の増加が問題になって来た。いわゆる「ビル2003年問題」である。実際今年9月、丸ビルが新たにオープンして、多くの企業が移転した。その結果、

都内各所のビルに空き室が生じた。「2003年問題」の実態と背景を追いながら、「都市計画」のあり方を考える。ゲスト：井熊均（日本総研・創発戦略センター所長）。

176.「超高層ビルが東京を覆う」〔2003年1月18日・『NHKスペシャル』・NHK・50分〕東京の風景が今急速な変貌を遂げている。汐留や品川、六本木などに最先端の設備を持つ超高層ビジネス街がオープンするためである。今年新たに完成する大型オフィスビルは、史上空前の227万平方メートル（東京ドーム48個分）に相当する。高層ビルを建てることによって、不良債権化した土地の収益性を引き上げ、流動化させようという狙いがある。しかし、建設ラッシュは既存のオフィスビルに深刻な打撃を与えている。景気低迷の中で大量のオフィスビルが供給されるため、2003年の都心の空室率はバブル崩壊以降最悪レベルの8パーセントを超えると懸念されている。また東京の一極集中を解消するために進められた臨海副都心なども集客率が目標の半分も達成していない状況である。都市再生の下に激変する東京の姿を描く。

177.「同潤会アパートが語る昭和史」〔2003年6月21日・『ETVスペシャル』・90分〕2003年春、東京都内に5つ残っている同潤会アパートのうちの主な3つが取り壊される。表参道に面した青山アパート、新宿新小川町の江戸川アパート、そして独身女性のために作られた大塚女子アパートである。同潤会は、大正13年、関東大震災、内務省により震災復興を目的として設立され、住まい方の提案にまで発展して画期的なアパートが16箇所造られた。今回取り壊される3つの同潤会アパートは、ひとつひとつ個性的で昭和史を語る存在である。消え行くアパートの住民一人一人を主人公に、同潤会アパートの物語を3話オムニバスでつづり、都市に『住むこと』の意味を考えていく。

178.「レトロアパート再開発が問う『風景の再生』」〔2003年10月3日・『ニュース23』・BSN<TBS系列>・30分〕東京・青山表参道の景観を形作り、多くの人々の心の中に強く焼きついてきた「同潤会青山アパート」が老朽化のために取り壊されることになった。「我々に課せられた課題は一人一人の心の中にしっかりと残るような『心の風景』の創造にある。心の中の風景がなくなることは、死を意味する」と安藤忠雄は指摘する。これまで何度も浮かんでは消えた再開発計画は、安藤氏のもとで実現へ一歩踏み出した。設計の依頼があつてから九年の歳月が流れていた。紆余曲折の末安藤氏がたどり着いたのは「風景の再生」というテーマであった。東京では、「都市再生」の合言葉のもと次々と再開発が進んでいる。そしてそのほとんどは、前にどんな風景があつたのか想像もできないほどの変貌ぶり、そこには人々の心の風景が残されることはない。日本の都市の再開発というのは「経済開発」の異名でしかない。原風景が次々と消えていく中で、人々は再開発に何を思うのか。東京都が2001年に行ったアンケートによると、「都心の景観づくり」

に関しては、64.6%の人が、「歴史的建造物・町並みを生かすべき」と答え、「土地の高度利用で建物を高層化」すべきという人は12.9%にとどまっていることは、注目すべきである。心の中のものを残しながら、新しい力をそこに置いていくという試みを安藤氏は提唱している。

179.「21世紀の地域づくり」〔2002年7月15日・『金曜フォーラム』・ETV・70分〕安藤忠雄（建築家）、長尾重武（武蔵野美術大学部・学長）、小林政治人（設景家）、宮崎緑（千葉商科大学・助教授）コーディネーター：黒田あゆみ（NHKアナウンサー）。『淡路島夢舞台』は、関西空港や、明石海峡大橋などとアクセスがよく、淡路島国際公園都市（350ha）の中核にあたる。設計を手がけた安藤忠雄氏は、建築デザインと自然環境の調和をコンセプトとした。ここでシンポジウム「21世紀の地域づくり～人と自然の共生～」が開催され、地域住民の協力をもとにして、どうすれば魅力ある地域づくりが可能となるかをめぐる議論が展開された。

180.「ウォーターフロントを生かした町づくり」〔2003年7月26日・『土曜フォーラム』・ETV・70分〕かつて世界の大都市の多くが港や河川、運河など水辺沿いに発達してきた。しかし、生産物流の拠点が水辺から遠のくにつれ、そうした都市は衰退していった。それに対して、近年世界各地で都市の活性化や快適性の向上を図るために、さまざまな「ウォーターフロント開発プロジェクト」が進められている。古くからの交通の要衝・関門海峡を挟む北九州市（福岡県）と下関市（山口県）では、美しく住み心地のよい都市づくりを目指して、水辺の光や景観を重視したウォーターフロント開発が進められている。両市は「景観協定」を結ぶなど、その取り組みは全国的に見ても先進的なものとして注目を集めている。暮らしと密着した水辺をいかにして作るか。都市開発と自然環境や景観との調和をどのように図るのか。地域間の広域連携を進めていくにはどうすればよいか。番組では、関門海峡地域やフィンランドなど各地の事例を検証しながら、ウォーターフロントの新たな可能性を考える。2003年7月8日、山口県下関市「海峡メッセ下関」で収録。パネリスト：中村良夫（景観工学）石井幹子（照明デザイナー、光文化フォーラム代表）サミ・ヒルヴォ（フィンランド大使館一等書記官）、江島潔（下関市長）、上田曜子（門司の景観を考える女性の会代表）司会：末田正雄（NHKアナウンサー）。

181.「運河の街・小樽」〔2003年9月10日・NHK・30分〕かつて、新潟も小樽と同様に、商業港として美しい運河の町であった。だが新潟は高度経済成長期の自動車の増加（モータリゼーション）の時代に、できるだけ多くの自動車を市街地に引き入れるために、かつての運河を埋め立てた街である。運河は、新潟という都市の貴重な景観財産であり、それはツーリズムの進展とともに観光資産にもなりえたはずのものである。結果的に、新潟の景観行政は大失敗をした。というより、当時の行政には景観という発想や、町並みの美学という哲学は存在しな

かったのかもしれない。新潟は、歴史的景観破壊の典型例として引用されるが、それと同時に、歴史的文化的に蓄積されるべき哲学の貧困の具体例ともなっている。越後平野はもともと米の生産地域であるから、それも仕方のないことであり、ないものねだりはするべきではないだろう。今、新潟ではかつての「堀」を掘り返そうという動きがあるが、もはや手遅れであることは確かである。

<関連映像資料>

- 182.「活用しながら保護する文化財（登録文化財）」[2003年6月12日・『思いつきテレビ』・TeNY・15分]
- 183.「歴史都市京都・共生の未来」[2002年7月19日・『金曜フォーラム』・ETV・70分]
- 184.「グラフィックデザインと都市美」[2003年12月6日・『BSフォーラム』・BS1・50分]
- 185.「都市を流れる時間」[2003年7月15日・「視点・論点」・ETV・10分] 話し手:鈴木博文。
- 186.「都市再生～快適都市へのシナリオ～」[2003年7月12日・『土曜フォーラム』・ETV・70分]
- 187.「風景の経済学」[2003年7月15日・『視点・論点』・ETV・10分] 話し手:進士五十八。
- 188.「東京を変える～森ビル社長・森稔氏～」[2003年5月10日・『今週の主演』・BS1・50分]
- 190.「商業地域のマンション問題」[2003年10月1日・『視点・論点』・ETV・10分]
- 191.「美術館の新たな挑戦」[2003年1月31日・『金曜フォーラム』・ETV・70分]

4. 現代都市と環境問題に取り組む建築家たち

192.「建築に命をこめるんや～安藤忠雄・創造の現場～」[2003年7月17日・『にげんどキュメント』・NHK・50分] 安藤忠雄は、つねに30以上のプロジェクトを抱える大物建築家である。その活動は国内にとどまらず、海外でも高い評価を受けている。「建築は生き物や。作り手と住み手が闘った分だけ命が出てくる。だからこそ難しく、おもしろい」と安藤は語る。さらに、自らの原点は、「精神の住まい」を作ることだという。最近になり、安藤は明石海峡に臨む海岸にわずか4メートル四方の建築を完成させた。一方で、富士山を望み名水が湧き出る敷地に『21世紀の寺』を設計するという依頼も受けていた。安藤が追及してやまない『建築の命』はどのようにして生み出されるのか。彼の創造の現場に密着し、その格闘の日々を見つめる。

<関連映像資料>

- 193.「風と光の絵日記～安藤忠雄～」[2003年5月11日・『美と出会う』・NHK・25分]
- 194.「光で世界を建築する～安藤忠雄あくなき戦い～」[2002年5月19日・『ウィークエンドスペシャル』・BS1・60分]
- 195.「環境時代の建築へ～安藤忠雄の挑戦～」[2002

年2月20日・『ETV2002』・ETV・45分]

- 196.「永遠に育て…～建築家・安藤忠雄と島の子供たち～」[2003年6月30日・ETV・45分]
- 197.「建築家マッキントッシュの光と影～」[2000年10月1日・『新日曜美術館』・ETV・45分]

5. 都市問題と住民参加・エコロジー

198.「広がる"スロー"な公共事業」[2002年11月18日・『クローズアップ現代』・NHK・25分]「どこに行っても同じような箱モノ」そんな従来型の公共事業から脱却する新しいタイプの公共事業が増え始めている。これまで事業を行政に陳情し作ってもらっただけだった住民が、一転して自らプランを立てたり、道路の簡単な改修などは自分たちで実施する（静岡県掛川市）、空き家となった住宅を改修して公共施設を作る（愛知県額田町）という、住民主体の公共事業。背景には、自治体の財政難や交付税の削減があるが、それを逆手にとり、業者に発注する代わりに技術を持った高齢者が自ら工事にあたったり（三重県藤原町）、計画期間をエンドレスにし、工期に縛られず理想のコミュニティ作りをめざしている。これまでの公共事業へのアンチテーゼとして、地方から発信され始めた「住民による住民のための公共事業」の現場を密着取材する。（NO.1664）スタジオゲスト:田中重好さん（名古屋大学大学院教授:地域社会学）

199.「街づくりに新しい風を!～豊橋・商店街の車いす工房～」[2003年11月8日・『きらっといきる』・ETV・30分] 商店街に開業した車いす修理工房「Kファクトリー」の社長・小杉健次さんと社員の原田昌宏さんが主人公である。小杉さんたちは去年8月、車いすの修理と販売を手がける「Kファクトリー」を開業した。場所は、愛知県豊橋市の花園商店街の中。小杉さんたちは、閉じこもりがちな障害者が積極的に街に出られるような「拠点」を作りたいと考えてきた。現在この工房には障害者だけでなく、街の人たちも気軽に集まるようになり、さながら街のサロンのような賑わいをみせている。そんな「Kファクトリー」が地元のマスコミで話題になり、商店街には次第に人通りも増えるようになった。そこで商店街では、小杉さんたちに障害者が訪れやすい街づくりへの協力を求めた。駐車場にスロープを取り付けたり、車いすの人たちが使えるトイレを計画。街の取り組みを知り、商店街に出店を希望する人たちも現れ、それまで7軒あった空き店舗は、今ではわずか1軒になった。「Kファクトリー」のこれまでと現在の活動を通して、車いす工房に夢をかける小杉さんたちと、変わり始めた商店街の人たちの姿を伝える。<http://www.nhk.or.jp/kira/>。

200.「エネルギー新時代にどう向き合うか～無資源国ニッポンの選択～」[2003年11月22日・『土曜フォーラム』・ETV・70分] 今年の夏、東京電力の原子力発電所トラブル隠しをきっかけに、首都圏に停電の不安が広がった。アメリカ北東部では史上最大の停電が29時間に

わたり続き、5000万人に影響が出るなど、このところエネルギーを再認識させる出来事が相次いでいる。意外と知られていない数字に日本のエネルギー自給率がある。その自給率はなんと4%。よくいわれる食料自給率40%に比べてもはるかに低い。しかも、この4%の数字の背景には、紛争が絶えない中東地域に石油供給のほとんどを依存している現状や、地球温暖化の原因となるCO₂の大量排出といった問題もある。どうすれば暮らしの豊かさを享受しつつエネルギー消費を減らせるのか。エネルギーの供給の脆弱さを踏まえたうえで、意識や暮らしをどう変えていけばいいのかなどについて、討論で掘り下げる。[出演] 鈴木邦夫（東京新聞論説委員）、近藤駿介（東京大学大学院教授）、長谷川榮一（経済産業省審議官）、浅井慎平（写真家）、星野知子（女優）[司会] 嶋津八生（NHK解説委員～神奈川・横浜市「新都市ホール」で収録～。

<関連映像資料>

201.「地域情報と文化の高度化をめざして」[2003年11月8日・『土曜フォーラム』・ETV・70分]（近畿総合通信局放送部長）門馬弘（毎日放送役員）田島俊（松下電器産業役員）中島不二雄（落語家）桂小米朝（NHK大阪放送局局長）御手洗正彦（NHK放送文化研究所主任研究員）鈴木祐司【司会】住田功一～大阪歴史博物館講堂で録画～。

202.「住民参加で変わるか～環境アセスメント～」[1999年10月9日・ETV・45分]

203.「自転車と街づくりを考える」[2000年10月20日・『金曜フォーラム』・ETV・70分] パネリスト：高田国道（日本大学理工学部交通土木工学科）、星野知子。

204.「環境ネットワークの推進」[2000年8月25日・『金曜フォーラム』・ETV・70分]

205.「これからのまちづくり」[2003年1月16日『男と女の生活学』・ETV・30分]

206.「町の灯を消さないで～ノルウエーの町おこし～」[2002年12月14日・『ヨーロッパ・ライフ』・BS1・20分]

207.「進化するエコタウン・再生木材で目指す究極のリサイクル」[2000年2月8日・『金曜フォーラム』・ETV・70分]

208.「美しい街づくり」[2000年9月27日・『BSフォーラム』・BS1・50分]

209.「美術館の新たな挑戦」[2003年1月31日・『金曜フォーラム』・ETV・70分]

210.「住民参加の新しい地域づくり「社会実験」～その可能性を探る～」[2003年10月13日・ETV・45分]

211.「21世紀新しい時代の都市公園の役割～新しい環境教育・都市公園のありかた～」[2000年12月 日・『BSフォーラム』・BS1・50分]

212.「安全で快適な都市・地域づくり～住みよさを実現する技術とは～」[2003年10月4日・『土曜フォーラム』・ETV・70分]

213.「花の大江戸・長屋に知恵あり」[2003年12月30日・『ETVスペシャル』・90分] 江戸時代の庶民の生活を手がかりにして、現代都市に住む人間の「ライフスタイル」を再考する独創的な番組。出演：石川英輔、渡辺信一郎、山本一力、立川談志。

6. 都市環境～過去と未来く世界の都市問題>

214.「激動巨大都市ベルリン～東西統一10年目の苦境～」[2003年5月31日・『BSプライムタイム』・BS1・50分] 時代の潮流の中で揺れる都市を見つめるシリーズ。ドイツの首都・ベルリンは、長い東西分断を経て「壁」崩壊を契機に急速な統合を遂げた。あれから13年、今、街は統合によって生じたさまざまな苦難に直面している。自由競争に巻き込まれた旧東独の企業が相次いで倒産、失業率は20%近くになる。より豊かな地域をめざす人口の流出と貧困層の増加によって街は荒廃の度を強めている。また、分断の後処理も終わっていない。中でも難航しているのは、旧東独政府が没収した財産の返還問題だ。西に逃げ土地を没収された人などが、返還を求めて現在の居住者と紛争を起こしているのだ。山積する問題に対処する市政府も、だぶついた公務員の人件費や東への支援、税収の落ち込みなど、統合による負担のため財政危機に陥ってしまった。今、事業や施設が相次いで廃止されている。ルポライターの鎌田慧さんは、ベルリンの壁崩壊を「20世紀最大のできごと」と考え、統合直後に現地取材した。鎌田さんは「ドイツは理念を持って旧東独を包み込もうとしているが、共生は容易ではない。10年が過ぎた後にその行方を見ることは、世界各地の異文化共生のヒントになる」と見ている。さまざまな問題を、市民は、そして当局はどう乗り越えようとしているのか。鎌田さんの目を通して、統合から13年目の苦境と解決への模索を見つめる。

215.「激動巨大都市・ブエノスアイレス～国家破産の街で～」[2003年1月19日・『ウィークエンドスペシャル』・BS1・50分] 世界経済の債務を返済できず事実上の国家破産をしたアルゼンチン。首都ブエノスアイレスは尾混乱に陥り、南米のパリ問い呼ばれた様相はすっかり変わってしまった。番組ではブエノスアイレスの現状を調査し、この事態が世界に堂影響するのかを考える。

216.「オランダ・夢の都市型住宅」[2003年2月12日『ヨーロッパ～住むならこんな家～』・BS2・75分] 世界の一流建築家が手がけた個性派住宅をめぐり、「21世紀の住まい」の姿を探る。新しい低層型高密度住宅の開発に市を挙げて取り組んでいるオランダ・アムステルダムを紹介する番組。その試みから、限られた土地を有効に快適に使って住む方法を考える。

217.「上海をデザインする男たち～中国上海・建築ラッシュの舞台裏～」[2003年12月6日『地球に好奇心』・BS2・75分] 急激な経済成長を続ける中国に世界中の建築家の目が注がれている。中でも上海は400メートルを

こえる高層ビルをはじめ、レストラン、一般の住宅に至るまで斬新な建物が続々と街並みを変えている。建築ラッシュは2010年開催の上海国際万博に向け加速中だ。9月末、中国の若手建築家の登竜門とされる建築コンペが行われ、300作品が競い合う。デザインの創造性ばかりでなく居住性、環境への配慮が厳しく問われる。設計模型の審査、現場でのプレゼンテーション、市民投票を経て入賞が決まるまでをカメラで追う。また、設計を支える職人は出身地方別に「四川隊」「河南隊」と結束して受注を競い合う。どのように上海の都市景観が変貌していくのか、建築コンペを軸にエネルギーあふれる姿を描く。

218.「荒野に生まれた環境実験都市～南インド・オーロビルの挑戦～」〔2002年6月23日・『素敵な宇宙船地球号』・NT21<テレビ朝日系列>・30分〕インド南部、ベンガル湾に面した森の中に“夜明けの町”オーロビルがある。34年前に誕生したこの町は、世界各国から集まった人々が共同で環境問題に挑戦する実験都市。かつての赤土の荒野には200万本以上の木が植えられ、あらゆる自然エネルギーを取り込むべく、いたるところにソーラーパネルや風車が置かれてる。ただ、こうした取り組みの中にも最近いくつかの問題が出てきた。全ての水を地下水に頼っているため、地下水の水位減少が農業の存続に影響し始めた。また、アカシアなどの成長の早い外来種により森がほとんど占有され、地域固有の樹木はほとんど見当たらない。より長く、より暮らしやすい社会をつくるための挑戦は、これからも世代を超えて続いていこうとしている。制作協力：グループ現代/制作著作：テレビ朝日。

219.「メガシティの挑戦(1)未来都市ベルリン」〔2002年2月24日・『宇宙船地球号』・NT21<テレビ朝日系列>・30分〕この番組では、「ポツダム広場の最新建築にこめられた特徴」として、最先端科学と最新技術の粋を集めたいくつかの環境対策を紹介している。例えばガラスによる外壁は、室内の気温を調節し、屋上に植えられた植物ビル内の熱の制御とともに貯水の効果がある。重要なのは、環境対策を施した施設の増加とともに市民の環境への意識も高まっていくことである。21世紀の都市のあり方として「環境都市」の道を選んだベルリンは、いわゆる持続可能(sustainable)な都市社会を目指している。番組では、先に取り上げた環境対策を重視した主な建築物として、ドイツの連邦議事堂「ライヒスターク」が紹介されている。ここでは地下300m天然の貯水槽にパイプを通し、発電機で暖めた温水と水を建物の冷房と暖房に利用している。旧東ベルリン地区にある「復活教会」の再生に利用した建築材は、「太陽蜂房」と呼ばれるもの。紙をコーティングした蜂の巣状の建築材で、太陽熱を利用して温度調節を行う。ベルリンの下町には「ソーラー学校」があり、太陽熱と太陽電池についての3つのコースから学べる。20歳から60歳近い人までさまざまな人がソーラー技術を学んでいる。不況の影響もあ

り、こうした将来性があるソーラーなどに新しい道を開こうという思いは強い。〔参照：『宇宙船地球号』テレビ朝日・番組ホームページ〕

220.「21世紀の道作り・新たな変革の時代へ」〔1999年4月2日・『金曜フォーラム』・ETV・70分〕1999年3月、これからの道のあり方をめぐって東京でシンポジウムが開催された。このシンポジウムは21世紀を目前に「交通渋滞・大気汚染・地域社会と経済の活性化・高齢化と福祉」といったこれからの道路整備にも深くかかわる課題と、これからの道路が果たす社会的役割を幅広く考えようというものである。車社会の急速な進展に伴い、いまや道路の主役は車となった。日本における自動車免許取得者は7100万人を越え、およそ7300万台の車が道路を行き交っている。しかしこれは文明の進歩と等価ではないのであって、車社会の進展は社会のさまざまな局面に深刻なひずみをもたらしている。たとえば交通事故による死亡者はかつてほどではないにしても、年間1万人近くに達し、マスメディアが用いるか否かにかかわらず、相変わらず日本は「交通戦争」の戦時中であるといつてよい。また、朝夕の交通渋滞に伴う経済的損失は、年間1兆円とも試算されている。まさに自動車社会ならではの壮大な無駄が生じている。さらに、排気ガスなどによる大気汚染も一向に改善の兆しが見られない。だが近年、市民意識の向上とともに、従来の道路づくりに無駄はないのか厳しい目が向けられるようになってきた。また、人間の生命の安全を重視した道路、環境に配慮した道路など、人々が道路に求める要望も多様化している。番組では、そうした現状を踏まえて行政と道路利用者というふたつの立場から討論が行われ、進んだ道路行政の先行事例としてドイツのフライブルク市の事例が詳しく紹介されている。フライブルク(Freiburg)は、人口20万人のドイツ南部バーデン＝ヴュルテンベルク州にある中世以来の商業都市である。街の中心部は、路面電車とバスを除いて一般の車は通行できない歩行者優先地区になっており、業務用の車には通行許可証を発行し、夜の7時から午前11時の間は通行できるようになっている。Kaiser Josef Strasseなどの中心部が歩行者優先になったのは1973年のことである。1960年代後半から、町にあふれた車が大きな社会問題になっていた。番組では、世界の都市問題対策のモデルともなったフライブルクの取り組みが具体的に紹介される。

<関連映像資料>

221.「上海～人口集中と公害問題～」〔2003年1月31日・『世界くらしの旅』・ETV・30分〕

222.「ロサンゼルス～インナーシティ問題～」〔2003年1月10日・『世界くらしの旅』・ETV・30分〕

223.「都市の未来を探る～5つの都市 5つの挑戦～」〔2000年8月26日・『ワールドドキュメンタリー』・BS1製作：ラジオ・プロダクションズ カナダ/2000年〕

224.「緑と風の町へ～シカゴの選択～」〔2002年11月24日・『素敵な宇宙船地球号』・NT21・30分〕

- 225.「ヨハネスブルクの挑戦」[2002年6月23日・『素敵な宇宙船地球号』・NT21<テレビ朝日系列>・30分]
- 226.「美術館の新たな挑戦」[2003年1月31日・『金曜フォーラム』・ETV・70分]
- 227.「巨大都市・(2)未来への選択 (3)90億人をどう養うか」[2000年6月28日/7月30日・BS1・各60分]
- 228.「エコロジーは江戸の華」[2002年6月23日・『素敵な宇宙船地球号』・NT21<テレビ朝日系列>・30分]
- 229.「東京・未来設計図～次の50年の生活と文化～」[2000年12月9日・『BSフォーラム』・BS1・50分]
- 230.「21世紀新しい時代の都市公園の役割～新しい環境教育・都市公園のありかた～」[2000年12月16日・『BSフォーラム』・BS1・50分]
- 231.「19世紀のパリ都市改造～現代都市改造の原点～」[2003年1月25日・『歴史でみる世界』・ETV・30分]
- 232.「パリ花の都の誕生」[2002年7月15日・『古地図で旅するヨーロッパ都市物語(1)』・BS2・75分]
- 233.「パリ～都市の再生～」[2002年11月25日・『世界くらしの旅』・ETV・30分]
- 234.「花の都を作るもの～パリの風景を探る～」[2002年6月23日・『素敵な宇宙船地球号』・シリーズ：メガシティーの挑戦・第10回・NT21<テレビ朝日系列>・30分]



以下に紹介するのは、＜参考文献＞「都市の記号論(2)ベルリン～日本のマスメディアのまなざし～」(2002)で紹介した、ドイツの新首都ベルリンの都市再開発に関連する映像資料である。中心市街地活性化という深刻な問題を抱えている日本の地方の中小都市の再開発にとって必要な理念・行政のあり方を探る意味で参考になると考えられる。なお、紙面の都合上、番組のリストのみを掲載する。

- 235.「とっておきの美術ドイツ・オーストリア四都物語(1)ベルリン・よみがえる美術都市」[2002年5月13日・BS2・75分]
- 236.「ドイツ・美の旅①生まれ変わるベルリン」[2002年7月7日『新日曜美術館』・ETV・45分]
- 237.「ドイツ・オーストリア美の回廊①ベルリン・都市とアートの創造」[2002年8月2日・BS2・25分]
- 238.「ドイツ・オーストリア美の回廊②ベルリン美術館物語」[2002年8月3日・BS2・25分]
- 239.「ドイツ・美術都市の挑戦」[2001年3月6日『新日曜美術館<アートシーン>』・ETV(NHK教育テレビ)・7

分]

- 240.「新しいアートのために～ドイツ・ギャラリーオーナー～」[2002年7月13日『ヨーロッパライフ』・BS1(NHK衛星第1放送)・20分]
- 241.「古地図で旅するヨーロッパ都市物語④ドイツ～都市の遺伝子を探して～」[2002年7月18日・BS2・75分]
- 242.「世界デザイン紀行<ベルリン>」[2002年11月7日・BS1・20分]

＜参考文献＞

- 吉田和比古「ハイパーテキストとしての『言語』と『映像』」『新潟大学教養部研究紀要』第25集 65-77ページ 1993年。
- 吉田和比古「都市の記号論～ベルリン・二項対立の首都再生～」『新潟大学言語文化研究』(新潟大学人文学部・法学部・経済学部 第2号 1-14ページ、1996年。
- 吉田和比古「メディア、あるいはファシズム (1)レニ・リーフェンシュタール論～」『法政理論』新潟大学法学会 第30巻 第2号 1-27ページ 1997年。
- 吉田和比古・他共著「オムニバス形式での総合講座『現代都市論』の教育効果を挙げる工夫」『大学教育研究年報』第3号、133-142ページ 1997年。
- 吉田和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ～(1)ドイツ戦後史の映像レファレンス～」『法政理論』新潟大学法学会 第33巻 第2号 66-150ページ 2001年。
- 吉田和比古・高津斌彰共著「総合科目『現代都市論』のためのビデオ・アーカイブ」～教育リファレンスとしての映像メディアア～『大学教育研究年報』第6号、5-27ページ 2001年。
- 吉田和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ～(2)過去をまなざしつつ、統一後の新たな再生へ向かって～」『法政理論』新潟大学法学会 第34巻 第1/2号 22-61ページ 2001年。
- 吉田和比古「都市の記号論(2)ベルリン～日本のマスメディアのまなざし～」『新潟大学言語文化研究』(新潟大学人文学部・法学部・経済学部 第8号 167-180ページ、2002年。
- 吉田和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ～(3)～映像は未来を予見する～」『法政理論』新潟大学法学会 第35巻第4号 22-61ページ 2003年。
- 吉田和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ(4)～1998年：ICEは凍りついた～」『法政理論』新潟大学法学会 第36巻第2号 p.1-46 2003年。
- 吉田和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ(5)～1999年：「ベルリンの壁」崩壊から10年～」『法政理論』新潟大学法学会 第36巻第3・4号 p.1-67 2004年。